

## 速読力を養う英語科の教材および学習指導開発Ⅱ

松尾 砂織 村上 直子 深澤 清治 松浦 伸和

### 1. はじめに

広島大学附属三原中学校英語科(以下、英語科)では、研究テーマを「自己表現の創造を支える実践的なコミュニケーション能力の育成」として実践研究を行い、昨年度までの研究では、コミュニケーションの中で基本的な語彙や文構造を活用できるための必要な基礎学力を、読むことを通して培うことにより、物語や説明文などのあらすじや、大切な部分を、特定部分のみにとらわれることなく読み取ることができる力、つまり読解力を育むための教材および学習指導の開発を行ってきた。

その中で、読むことに対する生徒の実態調査と速読教材を活用した中学校1年生と2年生での実践を行った。また、速読の指導を終えてからは、速読に対する生徒のニーズ分析を行い、速読に対する生徒の反応を知る中で、以下の3点について指導上の課題が明らかになった。

- ① 速読に必要な力は、練習量と単語力であると感じている生徒に対しては、授業の中で単語力を確実につけさせていく指導が必要である。
- ② 一度に多くの分からない単語に出会うと、生徒は戸惑ってしまい、意味を理解しようとして、精読をしてしまう傾向にあるため、速読教材の難易度も考慮していく必要がある。
- ③ 速読への慣れは、速読の練習量とも関係あると思われるが、分からない単語に出会っても、推測しながら物語を読み、理解する読解力を生徒に身につけさせる必要がある。

そこで本年度は、学習指導要領を踏まえて基礎的・基本的な知識・技能の習得及び読解力を育てる学習指導のあり方を探ることと、昨年度の課題を踏まえて、指導方法の改善と学習教材の改良を行い、速読による読む指導を行うことにした。

### 2. 研究の構想

#### (1) 研究目的

本研究は、コミュニケーションの中で基本的な語彙や文構造を活用できるための必要な基礎学力を、読むことを通して培うことにより、物語文や説明文などのあらすじや、大切な部分を特定部分のみにとらわれることなく読み取ることができる力、つまり読解力を育むための教材および学習指導の開発を行うことを目的とした研究の2年次である。

#### (2) 研究の対象と方法

2009年度に本学附属中学校に在籍した中学3年生の生徒82名(男子40名、女子42名)を対象とし、10月と11月から12月の2度に分けて実施した。ただし、10月の速読指導は、アクションリサーチ実習(以下AR実習)として実習生が担当したため、本稿には載せていない。

速読では、教材をできるだけ速く読み、書かれてある概要をとらえることをねらいとするため、使用する教材の難易度があまりに高いと精読になってしまう。そこで、使用する教材を2種類用意し、本校が使用している教科書*New Horizon English Course 3*と*Reading Basic Power*を用いることにし、速読に慣れるまでの3回は教科書を使用した。ただし、10月のAR実習の教材も教科書を使用して行ったため、教科書を使用した速読指導は7回行った。速読指導8回目以降は、*Reading Basic Power*を使用し、使用語数が多めの教材を用いた。実施の手順は、指導者が生徒にワークシートを裏にして配布し、指導者の合図で生徒はワークシートを表にし、一斉に速読を行う。速読が済んだ生徒は、かかった秒数を記録し、振り返りをしないように英文を隠してから、内容理解に関する問題5問に取り組む。生徒が問題を解き終わったら、内容理解の答え合わせを行ったのち、指導者はワークシートを回収し、結果を入力してWPM(Words Per Minute)を計算する。今回の実践は、五十嵐逸郎氏(平成14年)の実践に学びWPMの算出を行った。これは、従来のWPMの考え方に理解度を加味して計算したもので、計算式は次の通りである。

$$\text{WPM} = \frac{\text{総語数}}{\frac{\text{読解に要した時間(秒)}}{60}} \times \frac{\text{正答数}}{\text{設問数}}$$

図1 正答率を加えた補正WPM (仮称)

図2は、実際に使用した速読のワークシートで、教科書を加工したものである。理解度を確かめる問題は、T/F Questionを作成し、本文の内容が正しければTを、違っていればFを選択する問題にした。その理由は、TF Question形式の問題が生徒にとって普通の授業や定期テストで見かけるオーソドックスな問題なので、焦ることや抵抗を持つこともなく解くことができると考えたからである。

**Improve Your English Skill (英語力の飛躍)**

英語科 9 年後期授業プリント 速読学習日 ( / )  
9 - ( ) No ( ) 名前 ( )

速読用英文 (139words)

Spring came. Freddie, the leaf, was born on a branch of a tall tree. Hundreds of leaves were born on the tree. They were all friends. Together they danced in the breeze and played in the sun.

Daniel was the largest leaf and Freddie's best friend. He knew many things. He explained that they were part of a tree in a park. He also explained about the birds, the sun and the moon.

Freddie loved being a leaf. Summer was especially nice. Many people came to the park. "Let's get together and give them some shade," said Daniel. "Giving shade is part of our purpose in life. Making people happy is a good reason for living." Old people sat under the tree and talked of old times. Children ran around and laughed. It was fun to watch those children.

所要時間 ( ) 分 ( ) 秒

返り読みをせずに、できるだけ早く読もう。  
読み終わったらタイムを見て記入しよう。  
下線で折って、上の英文が見えないようにしてから、問題を見て答えよう。

山折り

問 次の文が本文の内容にあっていたら T、本文に書かれていない、あるいは本文の内容と間違っていたら F を選び、○で囲みなさい。

(T/F) 1. Freddie was the largest leaf.  
(T/F) 2. Daniel explained about the sun and the sea.  
(T/F) 3. Freddie didn't like summer because it was hot.  
(T/F) 4. Daniel and Freddie got together to give shade.  
(T/F) 5. Children sat and talked quietly under the tree.

正答数 ( ) 問 / 全5問中

図2 教科書を用いた速読シート

実施の手順は昨年度と大きく変わらないが、一つ変更を加えたのは、読むのに要した時間(秒)を記録する方法である。昨年度は、指導者の手元にストップウォッチを用意し、速読を終えた生徒が挙手をした瞬間から、その秒数を口頭で読み上げていた。しかし、速読の回数を重ねるうちに、生徒の挙手が見えなかったり、まだ読んでいる生徒の集中力が散漫になったり、正確な秒数を聞き漏らして記録できなかったりした課題が残った。そこで本年度は、実物提示装置でストップウォッチをマグネットスクリーンに映し出すことによって、指導者の秒数を聞くのではなく、生徒自身が読

むのに要した秒数を自分で見て、記録できるように変更した。

### 3. 授業の実際

#### (1) 速読指導の実際

##### ①事前のアンケート調査を実施

速読の指導を行う前に、事前のアンケート調査を実施し、生徒の速読に対する意識を調査した。10月のAR実習が済んだ翌週から始めたため、速読が定着しており、比較的スムーズに実施できたように感じた。

##### ②速読練習

先に述べた実施の手順に従って、授業開始後に行った。理解度を確かめる5問の正答は指導者が伝え、生徒に正答数を記録させてから回収した。

#### (2) 速読力を高める指導の工夫

昨年度の実践から、速読を行うことと平行して単語力をつけさせる指導が必要であることが分かった。そこで、速読を行った後に教科書で扱う本文や連語を一覧表にして、英語と日本語が対になったワークシートを使い、口頭練習を取り入れた。

実施方法は、2人1組のペアを作り、1人が英語を読み、それを聞いて日本語に訳したり、日本語聞いて英語



に直したりする活動で、時間を設定して短い時間で多くの英文や連語を言うようにさせた。速読だけでは分からなかった生徒も、この活動を通して内容理解を深めることができ、また何度も口頭練習することを通して、話すことへの意欲も高めることができるように工夫した。ペア活動が定着してきたら、時間を設定し、個人で英文や連語を口頭練習させることによって、個人の目標を設定させて読ませるインプット活動も行った。



#### (3) 教材の難易度に対する配慮

速読に使用する教材の難易度を一定にするために、教科書 *New Horizon English Course 3* で扱う読み物教材 *The Fall of Freddie the Leaf* を3つに分けて使用した。これは昨年度の課題②に対する改善策であり、教科書を使用することによって、教材の難易度が極端に

変わらないようにするためである。速読の際に分からない単語が出てきて内容を掴みきれなかった生徒を配慮して、それ以後のペアによるインプット活動や、英問英答と日本語による内容理解でフォローアップできるように工夫した。

#### 4. 速読の調査結果と考察

速読に対する生徒意識アンケート調査を事前と事後に行った（回答数は81名）。各質問項目に未記入がある場合は、質問項目ごとに対象から除外した。

##### (1) 速読に対する生徒の自己評価に関すること

図3より、AR実習と今回の速読指導の2回を終えて、読解力が大変向上したと認識している生徒は3%から25%に増加しており、全く向上していないと感じている生徒は8%から5%に減少した。理由としては、速く読めるようになったし、正解率が上がったから、テストでミスが減ったなどであり、今回の速読に対して肯定的な意見を持っている生徒が多いことが分かった。

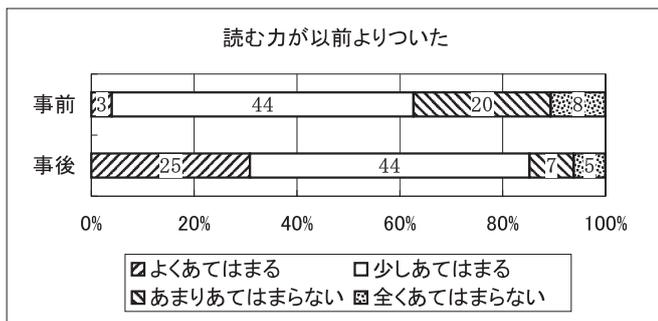


図3 読解力の向上に対する自己認識

##### (2) 読む活動に対する意欲に関すること

図4から、速読に限らず、英文を読むこと（音読・黙読を含む）が好きな生徒は速読指導後もあまり変化がないことが分かった。一方で、速読指導を終えて好きではないと考える生徒が増加している。

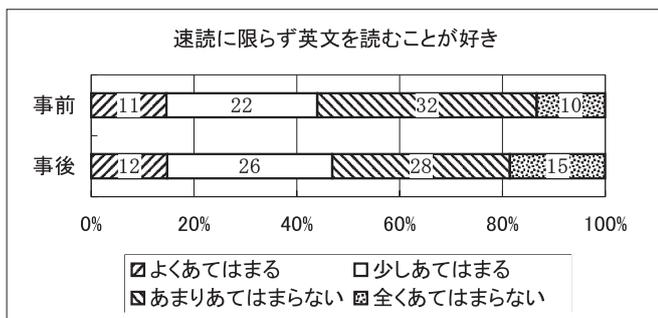


図4 読む活動に対する意欲

理由を見ると、読むことに対して肯定的な生徒は、う

まくスラスラと読めたら嬉しい・楽しい・格好いいと考えており、否定的な生徒は、分からない単語が出てくるとそこで止まってしまって嫌になる、速く読もうとすると混乱してしまうなどの理由が多かった。しかし、読むことを速読と限定しなかったために、生徒は音読・黙読・精読とすべてを含めて個々の判断で回答したと思われる。なぜならば理由の中に、読書が好きだから、聞くよりも楽しいからなどが挙がっていたからである。

##### (3) 読解力に関すること

学習指導要領の読むことの指導 **〔ウ〕物語のあらすじや説明文の大切な部分などを正確に読み取ること。**に関して生徒の意識を調査した。図5より、大切な部分を正確に読み取ることが大変できたと感じている生徒は、2%から12%、少しできたと思う生徒は19%から26%と増加していることが分かる。また、あまりできなかったと感じていた生徒が42%から28%と減少していることから、速読を続けることで大切な部分を正確に読み取ることができるようになったことが分かる。その理由は、内容理解の正解率が上がったこと、何度も行うことで速読に慣れたことが一番大きいようである。

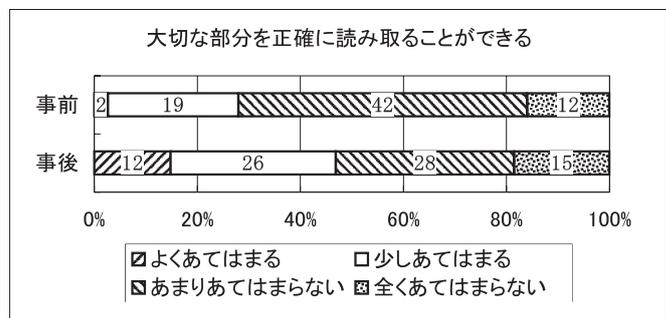


図5 正確に読み取る力

##### (4) 速読の難しさと読み方に関すること

速読の難しさを複数回答可で調査したところ、単語が分からない、熟語や連語が分からない、文構造が分からないが圧倒的に多いことが分かった。このことから、基礎的・基本的な知識の習得が不十分であるため長文を読んでも意味を理解することができず、まとまった文を読んで意味を理解することが難しいと感じていることが分かった。これは、速読だけに限らずたとえ精読にしたとしても変わることはないと言えよう。つまり、速読指導をしたからといって、生徒の語彙力が飛躍的に上がることは難しく、むしろ速読指導と平行した基礎的・基本的な知識の習得が望ましいと言える。生徒が速読の時に、どのように読んでいるかを5つの

選択肢から1つ選ばせたところ、順番に単語を日本語に訳しながら読んでいたり、文レベルで訳していたりすることが分かった。つまり、目で英文を読みながら頭の中で日本語に変換をしながら読んでいたことが分かった。一方で、英文を眺める、英語のまま読むと答えた生徒もあり、このような生徒の割合は、速読指導の事

前と事後で大きく変化することはなかった。このことから、生徒は英文のまま読むのではなく、一度大半の英文を日本語に訳してから考えているため、分からない単語や文と文のつながりが不明瞭になったときに読み進めることが難しくなることが分かった。

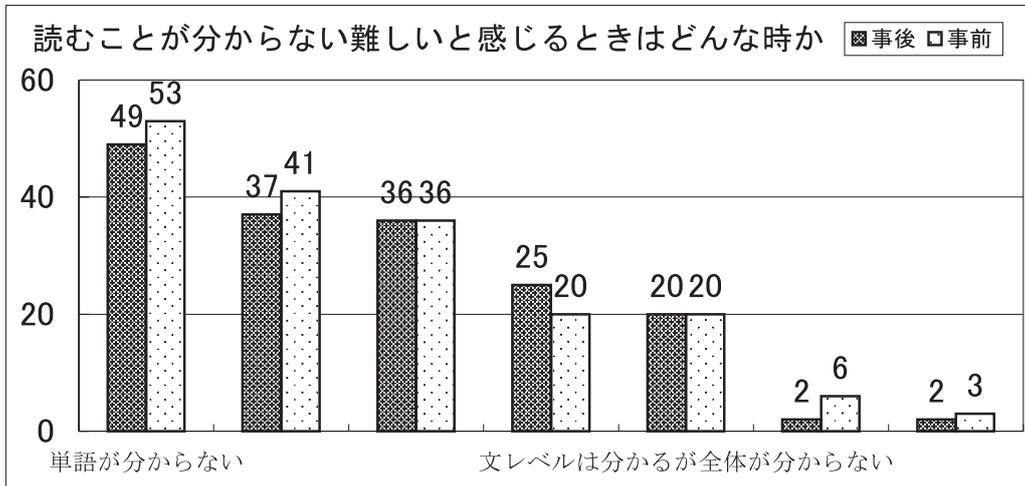


図6 速読をしていて難しいと感じる点

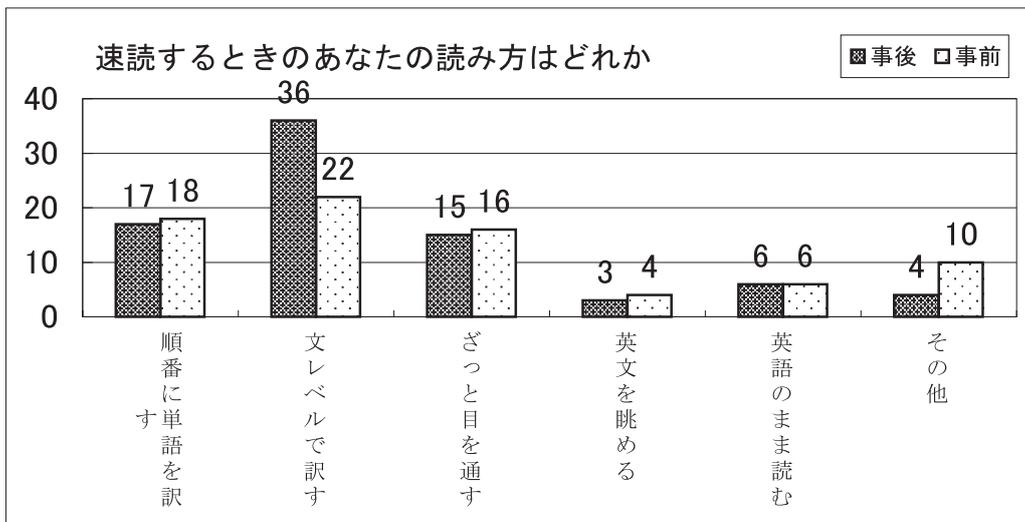


図7 自分の速読の仕方

(5) 生徒の感想から

速読に関する事後アンケートから、速読に対する生徒の感想を抜粋する。肯定的評価をしているものには○、否定的評価には×で記す。

設問1：授業で速読を行ったことで、読む力が以前よりついたと思いますか。その理由を書きなさい。

- 読める単語が増えて、長文が読めるようになった。
- 読み直さないというコツをつかんだから。
- 定期テストなどで、前よりも速く読むことができたようになったし、点数が上がった。

- 読解問題を解くスピードが速くなった。
- 読み返す回数が減った。
- たくさんの英語を何度も読んだから。
- 他の問題集で長文をしたとき、前よりも速く読めたから。
- とりあえず、読もうするようになった。
- × 速く読むので、読み方が分からない。
- × 基礎が不十分で結局読めない。
- × 速く読むことにこだわって内容が頭に残らない。

設問2：速読をして物語のあらすじや説明文の大切な

部分を正確に読み取ることができるようになりましたか。その理由を書きなさい。

- 少しずつ正解になっていきているから。
- 読みながらどこが大切か読み取れるようになった。
- 単語もいろいろ覚えたから。
- テストの点数がよくなったから。
- キーポイントを探す練習をしているから。
- たくさん練習をしたから。
- 速読をしながら大事そうなところを覚えるようにしたから。
- butの後など逆接の後に筆者の主張が書かれているのが少しわかってきた。
- 読むスピードが速くなり、内容理解に余裕が出ていたから。
- × 速く読むことに集中して頭に残らないから。
- × 単語が分からないから。
- × 英単語を日本語に直していくと、速読は難しい。
- × あまり正解していないと思うから分かっていない。
- × 時々意味が全く分からない英文があるから。
- × できるようになったと思うが点数になっていない。

### (6) 学習効果に関すること

表1は、速読指導に際して使用した中学校教科書教材 *The Fall of Freddie the Leaf* の各パート別総語数と速読実施日である。使用したのは1つの読み物教材を3つに分けたものであるため、各パート間の難易度には大きな差はないと思われる。ただし、総語数については、今回、事前・事後の調査に使用したテキストにお

いては約20語程度の差があり、事後調査に使用したテキストの方が長かった。読みに要した時間も2つのクラス全体で平均53.5秒（第1回）から60秒（第3回）に増加しているのがわかった。

表2は、事前・事後における1分あたりの正答率を加味した1分あたりの補正読語数（WPM）を比較した結果である。それによれば、WPMの事前・事後の推移を比較すると、1組には大きな差は見られないのに対して、2組のデータには1分あたり26.5語の差が見られ、事前、事後のWPMの平均値に統計上有意な差がみられた（ $p < .05$ ）。また、全体としても、2回の指導を通して1分あたり15.6語の増加があり、有意差傾向が認められた。すなわち、1分あたりの英文読みのスピードが、今回の短期間の速読指導を通して伸びたことがわかる。

その理由として、10月に行ったアクションリサーチ実習での指導の成果によるものであることが考えられる。前節で述べた速読指導に対する生徒の意識調査によれば、読む力が以前よりついたことを実感すると同時に、大切な部分を正確に読み取ることができた、と感じている生徒が増加しているのがわかる。アクションリサーチで行った指導の成果が、徐々に定着してきたものと思われる。ただし、大幅な増加を示した2組に対して、1組は伸びが認められなかった。その理由として、学級閉鎖の影響で速読指導を2回しか行えなかったために、速読への慣れや速読に触れる機会が少なかったことが影響したと考えられる。速読指導を行ってすぐにその効果が出ることはなく、速読の方法や意義についていかに生徒が納得するかも、速読指導の正否に影響していると言えるであろう。

表1 速読指導に使用した教科書教材総語数比較

	実施日	使用教材	総語数
第1回	11月25日	Freddie the Leaf: Part 1	139
第2回	11月26日	Freddie the Leaf: Part 2	134
第3回	12月1日	Freddie the Leaf: Part 3	155

表2 クラス間と全体におけるWPMの事前・事後推移

	PRE		POST		POST-PRE	F	<i>p</i>
クラス	M	(SD)	M	(SD)			
1組	107.5	(44.4)	112.1	(63.5)	4.6	0.107	0.744
2組	95.9	(37.2)	122.2	(53.2)	26.3	5.259	0.025 *
全体	101.6	(41.0)	117.2	(58.2)	15.6	3.026	0.084

\* $p < .05$

## 5. 成果と課題

昨年度の試行的な速読指導の実践を足がかりにして、2年次は速読指導の前に、事前と事後のアンケート調査を行い、生徒の反応を見ながら、生徒の実態に合った速読指導を試みた。その結果、速読指導を数多く行うことによって、生徒の語彙数を増やしたり、長文を読むことに慣れさせたりすることができた。しかし、生徒の感想を見ると、基本的な単語力が不足しており、長文を読もうとしても、全く読めず、内容理解に届かない生徒も少なくないことがわかった。基本的な単語力が不足すると、文構造の理解も難しくなり、まとまった英文のおおまかな意味をとらえることは難しい。そのため、今回試みたペアによるインプット活動以外にも、単語力をつける指導のあり方を探らなければならない。

## 6. おわりに

本研究は、速読指導を通して読む指導の充実を図ることを目的として行われたアクションリサーチである。今回の調査は、読解速度の計測などにより実証的に指導の成果を検証しようとしたものであるが、単純に読解速度が伸びたことを測定するのみでなく、より確かな内容理解も伴った速読、すなわち 'Read faster, read better' ができることをねらった試みであった。その結果、短期間ではあったが、速読力を養う教材およ

び指導法の開発を通して、内容理解を伴った読解速度の向上については、ある程度の成果を収めることができた。

今後、ある程度のスピードをもって読むという活動を生徒の中に習慣化、自動化していく試みを継続して行いたい。また、中学生が対象であるため、速読の基盤となる語彙・文法力が不十分な中で、速読指導がどのように精読指導あるいはその他の聞く・話す・書く技能の習得に効果をもたらすのかも学習成果として検証していきたい。

### 引用（参考）文献

- 1) 松尾砂織・村上直子・深澤清治・松浦伸和「中学校英語科における評価規準と評価方法の開発」、『広島大学学部・附属学校共同研究紀要』第34号, pp.205-212, 2006.
- 2) 松尾砂織・村上直子・深澤清治・松浦伸和「速読力を養う英語科の教材および学習指導開発」、『広島大学学部・附属学校共同研究紀要』, 第37号, pp423-428, 2008.
- 3) 五十嵐逸郎:「読解力の向上を図るための速読・多読指導の工夫－WPMの向上を目指した速読練習を通して－」,『福島県教育センター研究紀要』, 第138号, pp.54-55, 2002.